

ハートフル

三木市子どもいじめ防止センターだより

～きこえる いっしょに考えよう～

28号

令和4年12月発行

“SNSはハートをつなげるもの！”

近年、SNS(インターネットの交流サイト)での誹謗中傷の問題が深刻化しています。誹謗中傷とは、特定の人に対して悪口を言ったり、根拠のないことを言いふらしたりして相手を傷つけることです。まさにネットを使った“言葉の暴力”であり、「ネットいじめ」の典型的な行為です。

今年公表された国の総務省アンケートによれば、「ネット上で誹謗中傷に関する投稿を見たことがある」と回答した利用者は、全体の半数を超えています。東京オリンピックでも選手への心ない書き込みが相次ぎました。



「SNS誹謗中傷 あなたが奪うもの、失うもの ～#NoHeartNoSNS～」(総務省)より

右上の図にもあるように、SNSは誰かを傷つけるためにあるのではなく、人と人の心(ハート)をつなげるためのものです。総務省は、相手の人格を否定または攻撃するようなことを書き込んだり、広げたりしないために、次の3つのことを訴えています。

- (1) 誹謗中傷と批判意見(物事をよく考えて、よしあしを指摘すること)は違うのです。
- (2) 匿名(自分の名前を隠して知らせないこと)でも、証拠が残り特定されます。
- (3) カットとなっても立ち止まり、もし自分が言われたらどう感じるか考えてみましょう。

今年内閣府が発表した調査によれば、青少年のインターネット利用率は、高校生が99.2%、中学生98.2%、小学生(10歳以上)96.0%、低年齢層(6～9歳)74.3%でした。利用する機器で最も多いのは、中高生はスマートフォン、小学生はゲームです。さらに、小中学校には一人一台端末が配置され、ネット利用はますます加速しています。

日常生活の中で、何気ない一言が相手を傷つけ、悲しい思いをさせてしまうことがあります。一方、誰かの発言が他の誰かを元気づけたり、多くの人を勇気づけたりすることもあります。インターネットの存在が当たり前という時代にあって、より一層求められるのは、自分の言動に責任を持つこと、そして他者の気持ちを想像する力なのです。

いじめやトラブルから子どもを守れる環境づくり

鳥取県デジタル・シティズンシップエドゥケーター

国際大学 GLOCOM 客員研究員
いまだ たまみ
今度 珠美

キーワードは、「受容」・「共感」・「傾聴」

SNS で知り合った人を介し犯罪に巻き込まれる事案がたびたび起こっています。事件が起きると、ネット利用の問題と捉えがちですが、背景の要因を考えることが大切です。私が過去に対応した事案の中でも、忘れられない相談案件がありました。

ネットで知り合った人に何度も会いに行く女子中学生に指導をしてほしいと学校から依頼を受け、面談しました。女子生徒には両親がいましたが父親は再婚相手で、新しい父親と母親の間には弟がいました。両親はその弟だけを連れて度々食事や旅行に出かけました。家に一人残っていた女子生徒は、繰り返し話を聞いてくれる人を探していました。

この子に必要なのは情報モラル教育でしょうか、生徒指導でしょうか。そうではないですよね。私は関係機関と連携し、家庭環境の立て直しを支援しました。

これまで数多くの相談に対応してきましたが、ほとんどの事案は端末利用や SNS の問題ではなく環境的な要因、つまり子どもの周りの大人の問題でした。「話を聞いてくれる人はいない」、「褒められたことがない」、相談室ではそんな言葉をよく聞きました。つらい事案に対峙しながら、子どもたちに申し訳ない思いでした。

子ども対象の相談員がまず学ぶのは、「受容」・「共感」・「傾聴」の姿勢です。対応する子どもの中には虐待や性犯罪に巻き込まれた子もいます。固く閉ざされた心に向き合うには、「受け入れる」・「気持ちを想像する」・「話を聞く」ことが優先されるからです。しかし、この「受容」・「共感」・「傾聴」は、保護者や教育関係者にも必須の姿勢ではないかと思います。子どもにとって、話を聞いてもらえることは何より嬉しいのです。

自己有用感を高めるために

「自分は必要とされていない」、「自分には価値がない」、「自分は誰の役にも立っていない」と思い込む状態を自己有用感が低い、と表すことがあります。自己有用感が低いと、妬みという感情を他者に怒りや攻撃として向けることがあります。

自己有用感の低さは、いじめ加害や問題行動、ネットやゲームの長時間利用につながることもあります。子どもが「自分は必要とされている」と実感できる関わり、関係を作ることはとても大切です。それは、どれだけ自分に向き合い、話を聞いてくれるかで実感するのではないかと思います。だから、問題行動を繰り返す子の場合、先ず周りの人の関わり方を検討します。(それが全てのトラブル要因ということではありません)

しかし、忙しいお父さんお母さんが、いつでも子どもに向き合い傾聴することは難しい場合もあるでしょう。例えば食事中、家族だんらんの時間、出かけている時などに「今日どんなことがあったの?」、「そんなことがあったんだね」、「すごいね」、「それは悔しかったね」、「残念だったね」、「でも頑張ったね」というように受容・共感の語りかけや、ほめる言葉をかけるだけでもいいと思います。“すき間時間”などでも話を聞く場面を作ってみましょう。

「ネットいじめ」のサインは・・・

また、日頃から子どもの様子は関心を持って見守るようにしましょう。子どもは、トラブルは隠そうとします。特にネットトラブルは、深刻な状態になるまで発覚しないことがよくあります。交友関係や、よく使っているサイトやアプリ、日頃の行動などを把握しておくようにしましょう。

そして、次のような行動が見られた場合、いじめやトラブルに巻き込まれている可能性もあるので、問い詰めず学校の先生や相談機関に相談してください。(図1)

- ・ネット機器を急に怖がるようになった。
- ・ネット機器を急に、たびたび確認するようになった。
- ・ネット機器を見た後、落ち込むようになった。
- ・予定をドタキャンすることが増えた。
- ・理由を言わず学校に行きたがらない日がある。
- ・感情の起伏が激しくなった。成績、体重の変動が著しい。



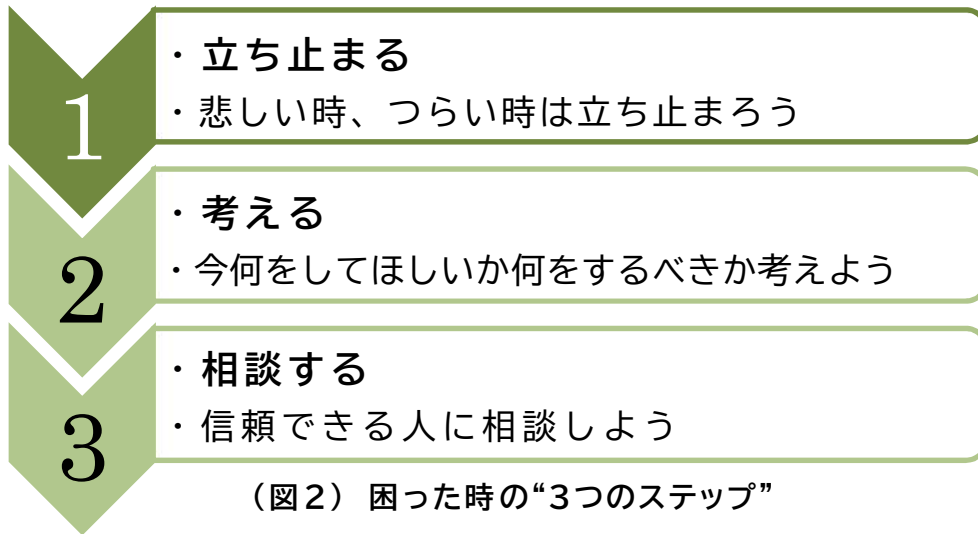
(図1) ネットいじめ、トラブルのサイン

困った時は、“3つのステップ”で

私が授業の最後にいつも児童生徒に伝える“3つのステップ”があります。(図2)

まずステップ1は「立ち止まる」、道路を渡る時と同じように、行動する前にいったん立ち止まります。そして、ステップ2は「考える」、自分は今、何をしてほしいのか、

何をするべきかを考えます。さらに、ステップ 3 は「相談する」、周りの大人に助けを求めます。子どもはすぐに行動してしまいがちですが、困ったときには、まず立ち止まり、考え、助けを求めることを繰り返し伝えています。



文部科学省の「令和元年度児童生徒の問題行動等調査結果」によると、いじめを受けた児童生徒の相談先は、「学級担任に相談」80.8%、「保護者や家族等に相談」21.6%、「学級担任以外の教職員に相談」7.4%、「友人に相談」6.6%という結果でした。(複数回答) やはり学校の役割は大きいです。子どもが安心していつでも相談できる環境を整えておくことはとても大切です。私たちの周りの大人が、子どもたちを受け入れ、関心を持って見守る環境を構築することが、いじめやトラブルを無くすために何より大切なことではないかと考えています。

<今度さんの紹介>

冒頭の他にも、日本デジタル・シティズンシップ教育研究会副代表理事。三木市をはじめ、全国各地で教員向けのメディアリテラシーやデジタル・シティズンシップの授業や研修で指導を行っています。

著書に『デジタル・シティズンシップ+』、『デジタル・シティズンシップ/コンピューター一人一台時代の善き使い手をめざす学び』(以上 大月書店) 『スマホ世代の子どものための情報活用能力を育む情報モラルの授業 2.0』(日本標準)など多数。

※デジタル・シティズンシップ教育は、コンピュータが進化したデジタル時代において、若者が善き社会をつくる市民となることをめざす教育です。



これっていじめ!?
そんなとき…
ひとりでなやまないで
そうだんしてね!



電話:

三木市子どもいじめ防止センター

0794-82-8110

相談日 月曜日～金曜日

ijime_boshicenter@city.miki.lg.jp

